

「新自由主義」的ミュージアム改革への批判をふまえた「フォーラムとしてのミュージアム」論の再考

田 原 よし乃

はじめに

幅広い分野にまたがるミュージアム・スタディーズの研究では近年、社会とミュージアムのあるべき関係やその課題が大きなテーマとなっており、それらは制度論や経営論、生涯学習論や人間形成論といった様々な観点から議論されている¹⁾。そうした研究の古典として参照されている理論の一つに、ダンカン・F・キャメロン(Duncan F. Cameron, 1930-2006)の提唱した「フォーラムとしてのミュージアム」論がある。1970年代当時のミュージアムの状況をふまえ、これからの社会でミュージアムが果たすべき役割を論じた同論は、発表から半世紀を経た今でもなお、説得力を持ちうるものなのだろうか。本稿では、先行研究をもとにミュージアムと社会との関わりについての今日的な課題を分析し、それを同論の提案と突き合わせることによって、同論が現代にもつ意義を検討する²⁾。

ミュージアムは公共施設として「社会に開かれて」いるべきだ、という考えは今や、ミュージアム改革の主流である。しかし、近代の西欧において生み出され、制度化されたミュージアムという概念は本来、王権や国家という政治や制度と明確に結びついている(松宮 2003)。ミュージアムはかつて、王権や国家が望む知識や価値観を人々に提示するための「教育」機関として位置づけられており、それによって公共施設としての意義を認められていた。特にヨーロッパ圏の国においては、近代のミュージアムが前近代からのコレクションを受け継いでいることが、ミュージアムの公共性を自明のものたらしめてきた(新藤 2016)。

しかし現代のミュージアムに期待される役割は、そのような一方的な普及活動に代わり、コレクションを媒介とした社会課題への取り組みや、市民社会のニーズに応える公共的機関としての働き、そのための館同士での協力体制構築などへと比重が移っている。こうした変化の背景には、ミュージアムに市場

原理が導入されたことで、集客という観点からミュージアムの活動が評価されるようになったことや、多様性への意識の高まりによって、ミュージアムの提示する文化や価値観が批判的に問い直されるようになったことがある(新藤 2012)。世界各地の民族学博物館が展示される側の人々を意識するようになった1980年代以降の傾向や、多くのミュージアムが所蔵作品のデータベースを作成し、一般の利用に供するためオンラインで公開するようになった近年の動きは、その表れといえるだろう。さらに記憶に新しい例でいえば、コロナ禍で全世界的に長期間の閉館を経験したミュージアムは、人々の来館が叶わずとも、文化の継承を担い、人々に情報を発信する機関としての役割を果たすため、自身の位置づけや役割を問い直すこととなった。「指定管理者制度」に代表される、運営面の改革に対する批判も含め、現代のミュージアムの課題は、ミュージアムが社会にもつ公共性の根拠が揺らいでいることで出てきたものだと解釈できよう。

新藤によれば、このように現代のミュージアムでは新しい公共性のあり方が問われており、それに応える改革では「社会に開かれている」ことが公共性の根拠となると見なされている(新藤 2016)。「フォーラムとしてのミュージアム」論は、広く認められた価値を示す場としての既存のあり方だけでなく、社会にある多様な人々や物事を取り上げ、議論する場としての役割をミュージアムに与えるよう提言する点で、この新しい公共性を先取りしていたといえるのではないだろうか。従来の一方的な価値提示の限界を自覚し、社会の多様性や変化に向き合おうとする同論の提案は、現代のミュージアム改革において、どのような意義をもつのだろうか。

そこで本稿では、現代的な公共性を模索する現代のミュージアムが抱える課題や改革の傾向を整理し、それをキャメロンの提案に照らし合わせることで、「フォーラムとしてのミュージアム」論が現代においてもなお説得力を有するのかを考察する。第

一節では、現在までのミュージアム批判の論点を整理した先行研究をもとに、公共性の根拠が問われるミュージアムの今日的な課題と、それに応えるとされる「フォーラムとしてのミュージアム」論への評価を確認する。ここでは、近年のミュージアム批判と改革の傾向をつかむ具体例として、2013年に出版されたクレア・ビショップ（Claire Bishop, 1971-）の『ラディカル・ミューゼオロジー』を参照する。ビショップの議論は、現代のミュージアムを支配する市場原理の影響を批判し、コレクションを媒介にミュージアムを議論的な空間として機能させるといふ、新しい公共性の形を提案するものである。続く第二節では、キャメロン自身が実際に「フォーラムとしてのミュージアム」論で提案しているミュージアム改革の内容を確かめたのち、同論の提案を現代のミュージアムにおける課題と改革の傾向に照らすことで、同論の現代的な有効性を検討する。

第一節 現代のミュージアムの抱える課題

(1) これまでのミュージアム批判——ミュージアムの公共性の問い直し

本節では、キャメロンが「フォーラムとしてのミュージアム」論を提案した時代の文脈を捉えるために、現代のミュージアムが抱える課題や、それに対する改革の傾向を把握する。近代の西欧で生まれ、国家や王権による一方的な価値提示の機関として制度化されたミュージアムは、現在までに数多くの批判を受け、それに応える改革を模索してきた。本項ではまず、新藤浩伸に依拠しつつ、現代までのミュージアム批判の流れを概観する。

新藤は、「特に20世紀以降、自明のものとされていた芸術や歴史の価値がゆらぎ、問い直されてからというもの、博物館は、現場においても研究においても、その近代性や西洋中心主義が批判にさらされていった」（新藤 2012: 20）これまでの歴史をふまえ、ミュージアム批判の論点を整理した。ミュージアムの機能を問い直すこれらの論点には、ミュージアムが近代国家のイデオロギーと紐付いていることへの批判や、芸術作品を脱文脈化して展示することへの批判、教養主義批判や提示される価値観の偏りに対する批判などがある。また博物館内部からも、自己反省に基づいて、社会的、政治的、倫理的、文化的に論争を喚起する場にしようと改革する動きが見ら

れた。さらに、これらの論点が博物館の一面しか捉えられていないことを指摘して、重視するものが教育であれ審美性であれ、博物館がある種のイデオロギーを生産する儀礼空間であることに変わりはないとするキャロル・ダンカンの議論や、既存の芸術概念や美術館制度そのものに反旗を翻したフィリップ・トンマーズ・マリネッティの主張もまた、ミュージアム批判の一部として言及されている。

新藤によれば、このように、近代の成立時には王権や国家主導での普及を担うことで認められていたミュージアムの公共性が、20世紀以降は批判の対象となったため、1970年代頃までのミュージアム改革では、社会の価値観に沿うような価値提示を行うことが目指されるようになる。しかしこの時期に考案された公共性のあり方もまた、社会で主流の価値観に偏っている点が課題として指摘され、以後は、これまで捨象されてきた多様性に対応した形での公共性が模索されていく。さらにこの時期、ミュージアムにも市場原理が導入されるようになったことで、ミュージアムの公共性は、集客という、経済的な成果からも判断されるようになった（新藤 2012: 22）。「フォーラムとしてのミュージアム」論は、このような時期に発表されたものである。その後、ミュージアム理論は多様性への対応と市場原理への対応を主な課題として批判と改革を積み重ねてゆき、現在「社会に開かれた」ミュージアムという考えが、新しい公共性の形として、現代のミュージアム改革の主流となっているといえるだろう。

しかし新藤は、ミュージアムが「開く」ことを目指すあまり、自身の役割を見失っている面もあるとして、これからのミュージアムにおける公共性の根拠を改めて問い直す必要があると述べている（新藤 2016）。「フォーラムとしてのミュージアム」論は、ミュージアムの価値判断を議論しうるものとすることで、ミュージアムの公共性を再定義したと解釈できるが、新藤の挙げた批判の数々がそれ自体も批判的に検討されてきたように、同論もその時々事情に照らした検討が必要であろう。重要な論点としてはやはり、1970年代初頭の現状をふまえて書かれた同論が、そこから大きく変化した現代のミュージアムにおいても説得力をもちうるのかという問いが挙げられる。

(2) ミュージアムの今日的な課題——ビショップの議論を手がかりとして

前項から、現代のミュージアムの課題は、多様性への対応や市場原理の導入によってミュージアムの公共性の根拠が揺らいでいることに起因しており、それに対する改革では、新しい公共性をどのように提案するかが重要であることがわかった。本項では、現代のミュージアムが社会との関わりにおいて抱えている課題や、それに対する改革の傾向をさらに把握する具体的な手がかりとして、ビショップの『ラディカル・ミュージアロジー』(2013)を参照する³⁾。新藤はミュージアムを「ものを媒介にして、過去と現在と未来の文脈を絶えずつくり出していく場所であり、そのプロセスに人々が参加していくことを励ます場所である」(新藤 2016: 232)と述べているが、ビショップの議論はまさに、単一的な価値観に基づく展示に終始する現状を批判し、歴史を多面的に議論する公共的な場としてのミュージアム改革を提案するものである。

さらに、ビショップの批判は、前項で確認したミュージアム批判の先にある、昨今のミュージアムが取り組む多様性や市場原理に対応するための改革に向けられており、より今日的な課題をふまえているといえる。価値判断の基準を国家から社会に「開く」過程で多様性への対応という新たな課題が浮上したように、ここでは、新しい公共性を模索するなかで現れた現代の課題を、ビショップの議論から確認する。

ビショップは同書冒頭で、1990年のロザリンド・クラウスによる「後期資本主義的美術館の文化理論」に言及し、美術館の現状を以下のように把握している。

芸術的な啓示を高度に個人的なかたちで受けるというよりむしろ、展示室において鑑賞者は第一に空間から高揚感を得るのであり、アートからのそれはその次だ。(中略) 現代美術を専門とする新しい美術館がかつてないほど激増し、そこでは規模の拡大と巨大ビジネスへの接近という二つの点が、エリート文化の貴族的 インスティテューション 機 関としての十九世紀型美術館モデルから、レジャーやエンターテインメントの大衆の神殿としての現在の美術館像への移行の主要な特徴となっているからだ。

(Bishop 2013=2020: 7)

今日的美術館では、公的な予算が削減され、寄付や企業による資金提供への依存が強まる状況がますます加速している。現代美術館は今やほとんどが民営となり、「あたかも美術史的研究を商業画廊に譲渡したかのようにも見える」(Bishop 2013=2020: 14) ものや、特にアジア圏においてはコレクションを持たない美術展示施設のようなものばかり増えて、コレクション・ポリシーを明言する館はわずかである、とビショップは現状を分析する。また、ビショップによれば、2000年以降に美術館で広く採用されている、作家・作品の生まれた時代や文化地域を超えた「テーマ展示」の手法は、美術館を「特定の物語や立場に適合させることなしに、あらゆる層の人々を喜ばせる美術展示場」にしようとするものであり、そこには「新自由主義的マーケティング」の手法と重なる「相対主義的要素」が指摘できる(Bishop 2013=2020: 34, 112)。

ビショップはこのように、現状大多数の美術館はコレクションを軽視する傾向にあり、歴史・政治領域に介入しない、資本主義的かつ大衆迎合的な態度をとっていると批判する。そして、それらとは異なる試みを行っている例として、アイントホーフェン(オランダ)のファン・アッペミュージアム、マドリッド(スペイン)のソフィア王妃芸術センター、リュブリャナ(スロヴェニア)のメテルコヴァ現代美術館の三館に注目する。ビショップによれば、これら三館は「周縁化され、脇に追いやられ、そして虐げられている(あるいは、そうされてきた)人々の利害や歴史を表象/代表することを試みている」(Bishop 2013=2020: 10)、ラディカルなモデルである。

たとえば、ビショップは、ファン・アッペミュージアムを、同館が過去に行った展示の数々をコレクションとして捉え、その再現を展示することで、美術館展示から歴史を考えるとといった革新的な方法を模索しているだけでなく、オランダにおけるイスラムフォビアや1989年以降の政治的变化をふまえ、中東のアートや共産主義時代に関わる東ヨーロッパのアートを取り上げている点で評価する。また、ソフィア王妃芸術センターでは、スペインの植民地主義期や第二次世界大戦期に関する資料と作品を収集し、それらを社会的・政治的文脈のなかに位置づけ

て展示することで、従来の歴史観では「周縁」と見なされてきた、特にラテンアメリカの役割に注目し、西洋中心主義でない歴史の捉え方を提示している。メテルコヴァ現代美術館は、旧ユーゴスラヴィア地域のトラウマとして未だ緊迫した状態にある戦争や大量虐殺といった民族紛争の歴史を、「歴史の流れというベルトコンベア上の一場面」としてではなく、「多数の重なりあう時間性」として表象することで、「未だ分節化されていない歴史的文脈を記述するためのひとつの方法」を提案している（Bishop 2013=2020: 68, 80）。

ビショップは、歴史を複数の視点から捉えようとするこれらの活動を「歴史の地図の多-時間的な書き直しであり、国民的枠組みや専門分野的枠組みの外部における芸術生産であって、同一の物語にすべてを引きずり込むグローバルな包括性の選択ではない」（Bishop 2013=2020: 80）ものと表して、ヴァルター・ベンヤミンを参照する。

『歴史哲学テーゼ「歴史の概念について」』（一九四〇年）においてベンヤミンは、権力の名の下で語られる、勝者の勝利を記録する歴史と、現在の諸問題に名を与え、それらを同定する歴史とを区別している。その区別の手段は、この現在の歴史的契機の源泉をさがすために過去を駆け巡ることである。これがひるがえって、過去に対する我々の関心の決定的な動機となる。美術館は、反覇権的となることができるのだろうか？本書で論じた三つの美術館はこの問いに対して、肯定的に応じているように思える。（Bishop 2013=2020: 81、括弧内および亀甲括弧内は訳者）

ビショップによれば、現代美術館の任務は「支配階級の間からは無視され、抑圧され、見捨てられてきた歴史を最前面へと引き出す」（Bishop 2013=2020: 81）ことだと表現することができる。ここでの文化はオルタナティブなものを可視化するための第一の手段となる。コレクションの正統性を固定化せず、むしろその価値や意味が常に問い直される空間としてミュージアムを位置づけることで、ビショップはミュージアムに現代的な公共性を付与しようと試みているといえよう。しかし、これら三館は皮肉なことに、2011年以降、いずれも緊縮財政を

掲げるネオリベラルな政府や市議会からの圧力にさらされているという。このような事態は、文化に触れることが教育や福祉のような基本的権利として認識されておらず、民間セクターに請け負わせてもよい贅沢品だと理解されているためだと批判し、ビショップは以下のように述べる。

この結果、二つの価値のシステムが衝突することになる——かたや文化的反省と歴史的反省の空間としての美術館、かたや慈善家のナルシズムの貯蔵庫としての美術館。こうした袋小路に直面するなかで、公的な美術館には、九十九パーセント「[の富をもたざる人々]の関心事/利害を適切に表象する能力がほとんどないように思えるかもしれない。だからこそ次のように考えることはきわめて重要である——オルタナティブは必ず実在する、そしてそれらは、現代美術館にとっての活気溢れる新たな使命を考案してくれるレーダーにしたがって作動している、と。（Bishop 2013=2020: 86、亀甲括弧内は訳者）

新自由主義による文化の経済価値への従属は、美術館だけでなく、より広く人文科学全般をも損っており、経済の数量的な尺度に依らない、オルタナティブな評価のシステムの案出が喫緊の課題であるとビショップは訴える。文化と人文科学の価値はそれ自体において重要かつ稀有なものであると理解されなければならない、それは経済価値や使用価値⁴⁾の外部に存在する。三館を例に論じられた美術館のキュレーションは、その目標が「芸術作品に既に内在しているものという基礎の上に、個人の名声を高めるためにではなく、問いを投げかけ、意識を呼び覚ますために」（Bishop 2013=2020: 87）構築されている点で希望がある。文化に触れることの公共性が軽視されているというさらなる課題はありつつも、三館の事例から導ける提案は、コレクションの価値や意味についての公共的で開かれた議論を通して、ミュージアムに新たな公共性を付与することである。

公共性の揺らぎが課題である現代のミュージアムでは、市場原理の導入からくる集客の要請に応えることが、わかりやすい公共性の示し方として選ばれる傾向にある。しかし、最終的には文化の価値を損

いう、そのような短期的な展望で多数派の価値観に迎合するのではなく、多数派の価値観と対立するものとして、これまでは捨象されてきた価値観（具体例は第二節第一項参照）にも光を当て、コレクションの価値や意味をたえず問い直されるものとして提示することが、現代のミュージアムの公共性として認識されるべきである、というのがビショッップの提案である。

(3) 現代のミュージアム改革における「フォーラムとしてのミュージアム」論

ビショッップの議論をふまえ、現代のミュージアムにおける課題と改革を改めて整理しよう。資本主義が運営に大きな影響を及ぼす現代のミュージアムでは、館の存続のためには短期間で経済的な成果を示す必要があり、故に展示内容は集客の見通しが立ちやすい、既に社会で評価を受けているものに偏る傾向にある。加えて、そうして社会で主流の価値観の表象として機能することで、ミュージアムをはじめとする文化に触れることが贅沢品であるとみなされ、ますます公共性が認められにくくなる事態を招いている。しかしビショッップによれば、ミュージアムは、このように短期的な成果のために大衆迎合的な展示で歴史・政治領域への介入を避けるのではなく、これまでは周縁化や抑圧を受け、捨象されてきた価値観にも光を当て、コレクションを議論の契機とすることで「歴史の地図の多-時間的な書き直し」を試みるべきである。ビショッップの議論は、コレクションの正統性を固定化せず、むしろその価値や意味が常に問い直される空間としてミュージアムを位置づけることで、新しい公共性を提案するものだといえる。

では、このような役割が求められる現代のミュージアム改革において、「フォーラムとしてのミュージアム」論はどのように評価されているのだろうか。吉田憲司（2003）によれば、発表当初、同論への注目度はさほど高くなかったが、1988年にスミソニアン国際センターが主催したシンポジウム「表象の詩学と政治学（Poetics and Politics of Representation）」において、将来のミュージアムのあり方として紹介されたことが契機となり、世界的に認知されるようになった。吉田はこの時期に「フォーラムとしてのミュージアム」論が注目された理由について、世界各地の民族学博物館が「従来の一方的な

民俗文化の展示に対する、当の民族からの激しい異議申し立てをうけ、そうした諸民族との共同性のもとに歩む以外に存在理由を求めることが難しくなってきた」（吉田 2003: 8）ためだと論じている。また、藤木周（2003）は、キャメロン論文の先進性を以下のように評価する。

これは当時としては新しすぎたのではと考えられるほどに、現代に通じる説得力を維持している。（中略）キャメロンの論考は作品であるとか展示資料にとつての空間ではなく、「パブリック・ミュージアム」としてのミュージアムの機能を問題としているので、市民参加などが問題となる来館者・利用者側の議論からも基盤の研究として価値がある。（藤木 2003: 307）

このような評価のもと、発表から半世紀近く経った現在でも、同論はミュージアムの課題を克服する、今後めざすべき方向性としてたびたび取り上げられている（Chinnery 2012; Parmentier 2012）。たとえば Ann Chinnery（2012）は同論をもとに、昨今のトレンドである「モノを持たないミュージアム（museums without objects）」を博物館教育上の意義の観点から批判的に検討している。また日本においても、日本のミュージアム界に同論を広めた人物である吉田を筆頭に、折に触れて言及されている（中牧 2005; 吉田 2014; 松永 2019）。吉田（2014）は、新しいミュージアム像を特定の地域や集団の文化や芸術を紹介する「リージョナル・ミュージアム（Regional Museum）」や、特定の国の文化へ芸術を紹介する「ナショナル・ミュージアム（National Museum）」と区別して、「グローバル・ミュージアム（Global Museum）」と表現し、「全体として、ミュージアムが、世界の文化、世界の人びととの出会いの場所であり、文字通り世界への窓口として、そこで築きあげられた展示すらもが、世界に向けても発信されていくような装置。私のイメージしている、『フォーラムとしてのミュージアム』というのは、そのような装置です。」（吉田 2014: 226）と表現している。

このように、「フォーラムとしてのミュージアム」論は、今日的なミュージアムの状況を分析し、これからのミュージアムが目指すべきあり方を考察する

手がかりとして参照されてきた。これら先行研究での関心は主に、市場原理との付き合い方よりも、吉田の観点のような、多様性への対応の仕方に向けられている。すなわち、市場原理の影響の見落としという、ビショップの指摘した現代のミュージアムの問題点が、ここにも現れている。このようなミュージアム研究の現状について、ビショップの議論をふまえた検討も必要であると考えられるが、とはいえ着目点が何であれ、同論は発表当初から情勢が大きく変わった今日もおおく支持されているといえる。では、キャメロン自身は同論を通して、ミュージアムの何を課題と捉え、どのような改革を提案したのだろうか。

第二節 現代における「フォーラムとしてのミュージアム」論の意義

(1) キャメロンによる「フォーラムとしてのミュージアム」論

本節では、「フォーラムとしてのミュージアム」論にてキャメロン自身が論じた内容を確認し、それを現代の課題と突き合せて検討する。本項ではまず、同論におけるキャメロン自身の議論を整理しよう。

先にも簡単に紹介したが、「フォーラムとしてのミュージアム」論は、当時ブルックリン・ミュージアムの館長を務めていたキャメロンによって、1971年のコロラド大学での博物館講義をもとに、1972年UNESCOが発行した*The Journal of World History*の特別号にて“The Museum, a Temple or the Forum”の題で掲載された。同論文でキャメロンは、現状のミュージアムを「アイデンティティ・クライシスにおちいって」おり、「自分たちが誰なのか、何者なのか、どうやらわからなくなっているらしい」状態にあるとみる (Cameron 1971: 11=2004: 2, 3)。「フォーラムとしてのミュージアム」という考えは、そのような現状に対する改革への提言として登場する。

キャメロンによれば、かつては私的で閉じたものだった個人のコレクションが、公共のミュージアムとして公開されるようになり、さらには、それを社会の価値観と結びつける民主的ミュージアムの概念が生まれたことで、ミュージアムは公共の価値観と関係するようになった。これによりミュージアムは

公共の利用に開かれていったが、民主的ミュージアムにおけるコレクションは、以前と変わらず、アカデミックな学問領域に馴染んだ人々によって「ある教育をうけた者にしか意味をもちえないような」(Cameron 1971: 16=2014: 10) モデルとして構築されている。コレクションを順序づける価値観が、中層階級エリート以上のものに偏っているのである。つまり、ミュージアムが提示する価値や意義は社会の一部の人間が認めたものにすぎないが、ミュージアムが公共の価値観の表象という体裁をとるようになったため、ミュージアムの提示するものは、社会全体で共有される価値観と一致した「真実」として人々に受け取られるようになった。ミュージアムはこの意味において、社会が認めた「真実」を奉る場所となり、神殿に似た機能を持つといえる。キャメロンはこれを「神殿としてのミュージアム」と呼ぶ。「神殿としてのミュージアム」は、人々に自身の認識やリアリティが社会で受け入れられているリアリティと一致していると確かめる機会を提供するが、先に述べた通り、そこには提示される価値観の偏りという課題があった。「神殿」のもつ欠点や限界を克服し、これからもミュージアムが存続するためには、以下のような姿勢が必要であるとキャメロンは述べる。

ミュージアムは、証明された卓越さを求め、選択のやり方や解釈においてできるだけ高度な客観性をたもつことに、揺るぎない一貫性をもたなければなりません。信用されるためには、真だとされるもの、時間の、熟慮されたうえでの審判をうけたもの、そういうものにたいして、自信をもって論じる用意とともに、未知のもの、理解されないようなものをも認めていこうとする気構えがなければなりません。(Cameron 1971: 17=2004: 11)

これは、第二次世界大戦以後に繰り返し議論・提案されつつも、大美術ミュージアムの多くが向き合ってきたことだが、今やミュージアムは、このような改革によって自身の提示するものに適切な筋を通すことに取り組まなければ生き残れない段階にある。一方で、現在ミュージアムに向けられている抗議に応えるには、「神殿としてのミュージアム」の改革のみでは限界があるという。そこでキャ

メロンは、同時に「対決や実験、議論のためのフォーラム」(Cameron 1971: 19=2004: 13)をミュージアムにつくることを提案する。科学技術の領域では、その結果がどれほど物議を醸しうるとしても、既存の価値観への挑戦が受け入れられ、認められているが、芸術や人文科学の領域では、「私たちの社会を批判したり、私たちの感性や価値観に逆らったりする美術家や学者」(Cameron 1971: 20=2004: 14)は、十分な判断や考察をされないまま、すぐに社会の敵とみなされてしまう。キャメロンはこのように現状を批判し、ミュージアムにとっての「フォーラム」を、文化的機会の民主化と均等化のために必要な機能であると表現する。「フォーラム」とは、体制側であるミュージアムが「公共的な審判と時の試練」(Cameron 1971: 19=2004: 13)を受ける場なのである。

これらキャメロンのいう「フォーラム」と「神殿」とは、いずれもミュージアムのもつ「社会学的機能」であり、ミュージアムにおいて両者はどちらも欠けることなく、しかし別物として扱われていなければならない。必要なのは、「時間をこえた、普遍的な機能(中略)を満たすユニークな機関に向けられた社会の必要に応え」るため「神殿」を改革することと、「因習や既成の価値観にさまたげられないフォーラム」をつくることである(Cameron 1971: 23=2004: 18)。ミュージアムは、それらを通して「リアリティの、新しく、挑戦的な認識、新しい価値観やそれらの表現、そうしたものがあらゆる人によって見られ、聞かれることを確実にすること」(Cameron 1971: 23=2004: 18)を目指さなければならない。このような考えゆえに、キャメロンは「フォーラムとしてのミュージアム」が「神殿としてのミュージアム」と入れ替わるべきだとは論じておらず、どちらかの機能を一方の機能に追加しようとするのもまた、両者の意義を損なう試みとして否定している。

フォーラムが存在しなければ、神殿としてのミュージアムは、変化にたいする障害として、孤独に立つほかありません。神殿は打ち壊され、破壊の武器は明日の神殿になって敬われるでしょう——しかし、昨日は失われてしまう。フォーラムがあつてこそ、ミュージアムは、変化を表明するものをうけいれたり

とりこんだりしながら、神殿として機能します。こんにちのフォーラムの渾沌と相克から、ミュージアムは、明日になれば、私たちが何者であり、どうしてそこに到達したかを私たちに教えてくれる、そんなコレクションをつくりあげなければなりません。(Cameron 1971: 24=2004: 19)

繰り返すが、「神殿」では社会で既に認められた支配的価値観とぶつかるものが排除・捨棄されうるため、「神殿」の軸となる価値判断を問い直す改革が必要である一方、「フォーラム」において、ミュージアムが価値を認めたという評価から離れて、既成の価値観に挑戦するようなものをも対決、実験、議論の対象に取り上げ、その価値を判断・考察することが、文化的機会平等のために必要である、というのがキャメロンの主張である。

また、同論に先立つ1968年の論文において、キャメロンが資料や実演といったミュージアムに展示されている真実(reality)と、ミュージアムの展示側がそれを説明する真実らしさ(verisimilitude)を弁別する必要性を述べていることは、「フォーラムとしてのミュージアム」論以前から、彼がミュージアムによる価値提示の公共性が自明でないと考えていたことをうかがわせる(Cameron 1968)。ミュージアムにおけるコミュニケーションは、モノという真実を媒介とはするものの、来館者がモノを解説するために付けられているメッセージは、展示側によって作られたものであるという点を意識しなければならない。ミュージアムはモノを解説する手助けをすべきであり、「万能であろうとするべきではない」(Cameron 1968: 38)と述べる同論文の考えは、ミュージアムからの一方的な価値提示を変えようとする「フォーラムとしてのミュージアム」論にも引き継がれているといえるだろう。

同論を公共性の観点から捉えると、ミュージアムで提示される価値観の正統性が自明でないと的前提に立ち、コレクションを議論の対象として「開く」ことで、ミュージアムに新しい公共性を付与するものであるといえる。もっとも、「フォーラムとしてのミュージアム」論を参照する後年の研究においては、キャメロンの提唱した内容とは異なる解釈で同論が用いられている場合もある。このような解釈の例には、とりわけ「神殿」と「フォーラム」を二項

対立として捉え、同論を「神殿」から「フォーラム」への移行を提言したと解釈するものが多く見られる。既に述べた通り、「フォーラム」の役割は「神殿」の改革とは別に、これからのミュージアムが社会に果たすべき責任として提案されたのであり、キャメロンは改革の必要性を述べこそすれ、「神殿」の意義を否定してはいない。現代のミュージアム研究におけるこのような解釈を念頭に置きつつ、次項では現代のミュージアム研究における同論の意義を検討していく。

(2) 「フォーラムとしてのミュージアム」論は現代の課題に応えられるか

ではここからは、ビショップの議論から明らかにした現代のミュージアムの課題と改革の傾向に照らして、「フォーラムとしてのミュージアム」論の提案を捉え直してみたい。ビショップ自身は議論において同論へ言及してはいないものの、ここまで見てきたように、両者の提案はいずれも、自明のものでなくなった現代のコレクションの正統性とどのように向き合い、どのように現代のミュージアムに公共性を付与するか、という課題に、コレクションを議論の契機として活用し、その価値や意味を問い直し続けることで応えようとするものであった。たとえば、ビショップが指摘する「大衆の神殿としての現在の美術館像」は、キャメロンが1970年代に捉えた、ミュージアムの混乱とアイデンティティ・クライシスが進んだ結果だといえよう。ビショップから引き出される現代のミュージアムの課題は、市場原理の導入によって存続のため大衆迎合的にならざるをえず、社会の価値判断を無批判に反映していることと、それによってますます公共性が認められにくくなることであった。

ビショップが三館の取組みを事例に提案した、市場原理からくる短期的な集客の要請から距離を置き、コレクションの価値や意味についての公共的で「開かれた」議論を行おうとする改革は、美術館で「我々にとっての価値とは何かについて反省し議論する空間」(Bishop 2013=2020: 85)を提供しうるものであり、きわめて「フォーラムとしてのミュージアム」の機能と近いものだといえるのではないだろうか。「フォーラム」とは、議論を通して「歴史の地図の多-時間的な書き直し」を試みることだと表現できるし、ミュージアムに議論の場を設けるこ

とは、これまでの「神殿」において「支配階級の目からは無視され、抑圧され、見捨てられてきた歴史」に目を向けることを目指しているからだ。

またビショップは、三館の実践から構想される美術館の変化を以下のように述べている。

歴史に対するこの現在-志向のアプローチは、今日についての未来への視線をともなった理解を生み出し、また美術館を、活動的な歴史的行為主体として再想像する。この行為主体は、国民的な自尊心や覇権の名の下ではなく創造的な疑問や不同意の名の下で語るのだ。それが鑑賞者として連想する人たちは、個々の作品の 아우라 を感じるべく黙想にふけるよう促されることはもはやなく、〔展示を〕読解したり〔それに〕反駁したりするための意見や立場をもつ者としてその場にいるということに気づかされる。(Bishop 2013=2020: 82、亀甲括弧内は訳者)

この記述も、キャメロンが提案した内容と重なるものだろう。これまでの「神殿」では一方的に来館者に提示されるものだったミュージアムからの価値提示は、改革によって問い直されうるものとなる。これまでは捨象されてきたような既存の価値観への挑戦は、「フォーラム」において議論される。さらにキャメロンは、ミュージアムがこうした改革を通して、これまでミュージアムを訪れなかった層に働きかけ、文化的機会平等を生み出すよう取り組まなければならないと論じている。これも、短期的な集客のために従来の「神殿」的展示を繰り返すことを批判した、ビショップの議論と一致している。

とはいえやはり、キャメロンが「神殿」の価値観の偏りを課題としつつも、それを打ち壊し、あらゆる価値判断を不確かなものにしてしまう危うさを指摘していることは、忘れてはならないだろう。キャメロンの描くこれからのミュージアムは、これまでの公共性、つまり来館者が自身と社会の価値観を突き合わせる場所としての「神殿」と、これまでのあり方には不足していた公共性、つまり「神殿」ではまだ価値や意義を認められていないものをも議論し、さらに広い多様性に応える場所としての「フォーラム」を、併せ持つものでなければならない。ビショップの批判に応えうる、キャメロンの提案する

新しい公共性は、「神殿」と「フォーラム」が二項対立でないからこそ実現するものではないだろうか。

以上、ビショップが考察した現代のミュージアムが直面している課題は、キャメロンが1970年代に指摘した状況の延長線上に存在しており、ビショップがその解決として示すものもまた、キャメロンの提案に通じていた。改革された「神殿」と「フォーラム」の両機能を備えたミュージアムのあり方を、ビショップのいうオルタナティブの一案だと捉えることが可能であるならば、提示されるものの正統性を見る側とともに問い直し続けることで、揺らぎのなかにあるミュージアムに新しい公共性を付与しようとする「フォーラムとしてのミュージアム」論は、現代の課題にも説得力をもつといえるだろう。

おわりに

本稿では、ビショップの議論を具体的な手がかりとして、現代のミュージアムの課題と改革の傾向を確認し、それを「フォーラムとしてのミュージアム」論に参照することで、同論のもつ現代的な意義を検討した。第一節では、新藤の議論から、現代のミュージアムの課題はミュージアムの公共性の根拠が揺らいでいることに起因していることと、ビショップの議論から、ミュージアムが資本主義による集客の要請に応えるため、社会で主流の価値観の表象として機能することで、ミュージアムの公共性がますます認められにくくなっていることを確認した。ビショップの議論は、これまでは周縁化や抑圧を受け、捨象されてきた価値観にも光を当て、コレクションの正統性を固定化せず、むしろその価値や意味が常に問い直される空間としてミュージアムを位置づけることで、新しい公共性を提案するものだといえた。これら今日的な課題に対し、第二節でみた「フォーラムとしてのミュージアム」論は、新しい公共性を提案することで応えようとする現代のミュージアム改革の傾向を先取りしており、ゆえに現在も支持されているのだといえた。

同論から引き出せる、これからのミュージアムにおける公共性とは、コレクションの価値や意味を問い直されうるものと捉えることで、従来の一面的な価値観による普及を克服し、議論を通してミュージアムを多様性に開いていくことであった。さらに、

ビショップの指摘から、市場原理の導入によって短期的な集客が要請されている現代のミュージアムでは、従来の「神殿」的な展示でそれを達成しようとする動きが見られるが、これはむしろミュージアムの公共性を認められにくくするものであるという、新たな現代的課題も明らかになった。この点について「フォーラムとしてのミュージアム」論では、「神殿」の改革と「フォーラム」をつくることによって、これまでミュージアムを訪れなかった層にも働きかけていくという、文化的機会平等の実現が目指されていた。

しかし「フォーラムとしてのミュージアム」論の提案する新しい公共性を実現するには、キャメロン自身も強調している、「神殿」と「フォーラム」を併せ持つミュージアムであることが重要だと考えられる。これからのミュージアムは、提示する価値や意味を問い直されるものとして「開き」、それによって社会に求められるものでなければならない。ビショップの指摘する現代の課題に応えるためには、これまでの「神殿」が認められてきた公共性のあり方を現代の課題に応えよう改革しつつ、「神殿」のみでは実現できない公共性のあり方に「フォーラム」として応えることが必要である。「神殿」と「フォーラム」を併せ持つこそ、同論の提案するこれからのミュージアムは、現代的な公共性のあり方を実現するものとして説得力をもちうるだろう。それをいかにして実際の活動に落とし込むのかという点については、引き続き検討が求められる。

また本稿では、「フォーラムとしてのミュージアム」論が日本のミュージアムに固有の課題に対しても説得力を持ちうるかという考察は十分にできなかった。西欧近代においてコレクションが制度化され、近代ミュージアムとして一つの思想を形成してゆく流れを分析した松宮秀治（2003）は、日本におけるミュージアムの概念を以下のように表現している。

ミュージアムという概念が日本語において「博物館」と「美術館」に分極してしまったことによって、ミュージアムという巨大な束概念、統括概念がもつ内包領域を全体として理解する方向を閉ざしてしまった。つまり、その各部分の機能のみを御都合主義的に切り取ってしまう方向に進ませてしまった。たし

かに、西欧のミュージアムという概念は分割可能なユニット概念であるが、またそれと同時にきわめて広領域を包括する概念でもある。つまり「ミュージアム」とは、それぞれの個別的機能を独立させる一方で、無限に細分化していこうとするものに対して、一定の概念枠を与えようとする統括概念である。(松宮 2003: 9)

「フォーラムとしてのミュージアム」論は北米の当時の現状を念頭に書かれたものであるし、現代のミュージアムの課題を捉える手がかりとしたビショップの議論も、アジアの現況を視野には入れつつも、西欧社会で生まれたミュージアム概念を前提としている。本稿ではこれらの論考を手がかりに検討を進めてきたが、それを日本の現状の分析に用いるにあたっては、松宮の述べるように、西欧と日本とでのミュージアムの差異を意識すべきであろう。欧米のミュージアムを念頭に論じられたキャメロン論文を、日本のミュージアム特有の文脈に照らして捉え直すこともまた、同論の現代的意義を再考する上で有効であると考えられる。

注

- 1) ミュージアム研究を行う学問領域としては、一般的には博物館学の立場がイメージされるかもしれない。光岡寿郎 (2014) は、博物館学を、ミュージアムの運営、経営といった実践的な研究や、主として日本を対象とした歴史研究を想像させる傾向が強いもの、英語圏の「museum studies」を、教育学、認知心理学、社会学、文化人類学といった広義の社会科学に軸足を置いた研究領域としても理解できるものと表現している。ミュージアムの提示する価値が自明のものではなく、そこに求められる教育が変質したことで、その公共性の根拠が揺らいでいる現代、今日的な公共施設として振る舞おうとするミュージアムが、人々に何をどのように提示するのかを問い直そうとする本研究は、このミュージアム・スタディーズの領域に含まれる。かつ、教育学のうちでもミュージアムを扱う観点は複数あり、たとえば社会教育の分野では、源流である通俗教育の影響の強さから生涯学習論への言い換えが進んでいるし、ミュージアム研究が盛んな生涯学習論の分野では、柔軟な学びの場の一つとしてミュージアムを捉え、学習者に焦点を当てる傾向

が見られる。本稿では、これらとはやや立場を異にするものの、働きかける空間と、それに刺激を受けた来館者との相互作用としてミュージアムを捉え、再考したい。

- 2) 「ミュージアム」という言葉には、日本語でいう博物館や美術館、科学館等、幅広い施設が内包されている。英語ではミュージアムの一語に集約される「博物館」概念は、明治期に日本へ輸入されたのち、「博物館」と「美術館」とに分極し、それぞれ異なるものとして捉えられるようになっていった (松宮 2003)。博物館法における「博物館」はいわゆる博物館から美術館、科学館、さらには動植物園や水族館までを視野に入れた広い概念に設定されているが、一般的な認識はもとより、ミュージアム改革の先行研究においても、狭義の博物館や美術館に対象を絞って論じるものは少なくない。「博物館」という言葉の射程については改めて歴史的背景をふまえた検討が必要だが、本稿ではひとまず、引用部分以外では、これら幅広い施設を指す言葉として「ミュージアム」の呼称を採用する。

- 3) ビショップはイギリスに生まれ、現在はアメリカで活動する美術批評家である。2008年からは、ニューヨーク市立大学大学院センターにて美術史学の教授を務めている。

- 4) 同書注釈によれば、「使用価値」という尺度には「文化産業」「教育」「リクリエーションと観光」「象徴としての表象」「行動の正当化」「社会的連帯と統合」「金銭的・経済的利益」といった観点で文化や人文科学を理解することが含まれるとされる (Bishop 2013=2020: 106)。

引用・参考文献

- Bishop, Claire. (2013) *Radical Museology, or, What's 'Contemporary' in Museum of Contemporary Art?*, London: Koenig Books. (=村田大輔訳 (2020) 『ラディカル・ミュージアム：つまり、現代美術館の「現代」ってなに?』月曜社)
- Cameron, Duncan F. (1968) A Viewpoint: The Museum as a Communications System and Implications for Museum Education, *Curator: The Museum Journal*, Vol.11, Issue 1, pp.33-40.
- Cameron, Duncan F. (1971) The Museum, a Temple or the Forum, *Curator: The Museum Journal*, vol. 14, issue 1, pp. 11-24. (=高島平吾訳 (2014) 「美術館——神殿かフォーラムか」『あいだ』99号、2-19頁)
- Chinnery, Ann. (2012) Temple or Forum? On New Mu-

seology and Education for Social Change, *Philosophy of Education*, Claudia W. Ruitenberg, editor, Philosophy of Education Society, Urbana, Illinois, pp.269-276.

藤木周 (2003)「フォーラムとしての美術館に求められる美術館教育：ギャラリー・トークについてAndrea Fraserと考える」『美術教育学』24巻、303-316頁

松宮秀治 (2003)『ミュージアムの思想』白水社

松永千紗 (2019)「ドーセント・ツアーのエスノグラフィーサンノゼ日系アメリカ人博物館における『フォーラムとしての博物館』をめぐって」『総研大文化科学研究』第15号、113-136頁

光岡寿郎 (2014)「小特集：ポスト・ミュージアム・アート」から「[研究ノート] ポスト・ミュージアムが問われるべき位相」表象文化論学会ニューズレター『REPRE』21号、URL：<https://www.repre.org/repre/vol21/post-museum-art/note02/>、2023年4月29日最終閲覧

パーモンティエ, ミヒャエル (2012)『ミュージアム・エデュケーション——感性と知性を拓く想起空間』眞壁宏幹訳、慶應義塾大学出版会

新藤浩伸 (2016)「文化的公共空間としてのミュージアム」中小路久美代、新藤浩伸、山本恭裕、岡田猛編著『触発するミュージアム 文化的公共空間の新たな可能性を求めて』あいり出版、232-243頁

中牧弘允 (2005)「ミュージアムの経営人類学—アーカイブズの経営戦略への提言—」『アーカイブズ』(19)、国立公文書館編、21-36頁

新藤浩伸 (2012)「博物館批判の論点に関する一考察—文化学習基盤としての博物館に向けて—」『生涯学習基盤経営研究』第36号、17-31頁

吉田憲司 (2003)「『フォーラム』を睥睨するのは誰か——犬塚康博氏による『「アイヌからのメッセージ」展の吉田憲司フォーラム論批判』をただす」『あいだ』97号、2-19頁

吉田憲司 (2014)『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店

